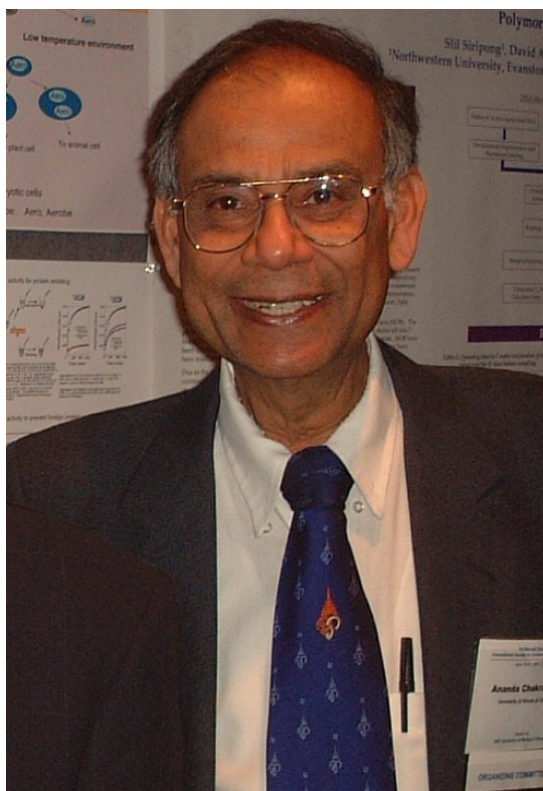


Ananda M. Chakrabarty 博士の逝去を悼む



Ananda M. Chakrabarty 先生（イリノイ大学シカゴ校微生物学/免疫学科名誉特別教授）が 2020 年 7 月 10 日に逝去されました。Chakrabarty 先生は、特に難分解性環境汚染物質の微生物分解の研究で環境バイオテクノロジーに多大なる貢献を果たしました。また、米国最高裁での裁判を通じ、DNA 組換え微生物が特許になり得ることを世界で初めて勝ち取った（いわゆる Chakrabarty 裁判(1980)）ことも、その後の環境バイオテクノロジーに大きな影響を与えました。本学会も Chakrabarty 先生に大変お世話になっております。2000 年、京都で開催された第 5 回 International Symposium on Environmental Biotechnology (ISEB200) では基調講演(Pathogenic potential and toxic chemical degradation by *Burkholderia cepacia*)をしていただき、さらに 2004 年にはシカゴで ISEB2004 を主催いただきました。

Chakrabarty 先生は日本人研究者との交流も盛んに行っておりました。1980 年に古川謙介先生が Chakrabarty 研に客員准教授として参加されたのち、1980 年代終わりに金原和秀先生（本学会副会長）、そして当方がポスドクとして参加しました。以降も 9 名の日本人研究者がお世話になっております。

学生やポスドクが出したデータをもとにご自分の「卓見」を述べるのが無上の楽しみのようなものでした。その時の口癖が「My hunch is・・・(私の考えでは・・・)」です。しばしば、超絶な卓見を言われるので、学生やポスドクは目を白黒させ困窮していました。しかし、いかに着想力豊かに「超絶な卓見」を思いつき、述べることができるかが、研究を大きく展開するうえで重要であることを、研究室を主宰するようになって初めて理解しました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

Chakrabarty 先生が亡くなられたと聞き、ぽっかりと心に穴が開きました。私の呼び名は「カズヒデ」ではなく、最後まで「カジュヒデ」でした。研究仲間は学生も含めて皆 AI (アル) と呼んでいましたが、いつも Professor Chakrabarty と呼んでいたのも、日本人は何で AI と言わないのかと何回も言われました。日本では恩師である矢野圭司先生を圭司とは決して呼べません。

PCB の微生物分解を専門として博士号を取得したので、分解系の研究をするのかと思って Chakrabarty 研にポスドクとして行ったら、アルギン酸の生合成を研究しなさいと言われ、戸惑ったのを今でも思い出します。嚢胞性繊維症の患者に感染する緑膿菌の研究だと知り、Chakrabarty 先生が医学領域にシフトしたことを知りました。その後は、緑膿菌の酸化還元酵素の一つであるアズリンが抗がん作用を持ち、その医薬品開発を行うなど、精力的に医薬分野の研究を進めていました。晩年はマラリアの薬を研究したいと言っていたようです。

確か、クオラムセンシングのパイオニアである Peter Greenberg 博士から、「君らのボスは新しいことをやってはすぐに違うことに切り込んで食い散らかす」みたいなことを言われたのを思い出します。しかし、考えてみれば、そのように言われるのは、分解系プラスミドの発見や、アルギン酸生合成の制御の解明やアズリンの抗がん作用の発見など、次々に行った先駆的な研究は、微生物学の新たな領域を築くような研究であり、斬新な研究をいくつも行ってきたことの証であったと思います。

多くの研究者と交流し、幅広い人脈を持つ先生でした。研究者なら、自分もそうありたいと思う孤高の研究者でした。

ご冥福をお祈り申し上げます。

環境バイオテクノロジー学会・副会長

金原和秀



31 年前に加藤会長と金原が Chakrabarty 研究室にポスドクとして在籍していた時